

振り返りに始まる30年後への展望

●炎暑下、新会員交えて記念誌づくり

30周年記念パーティーが開かれた7月1日をスタートに「30周年記念誌」をまとめる編集チームへの参加を呼び掛け、これまでに12人が参集した。炎暑の時期ながら、早速編集会議を日本記者クラブで開き、作業が始まった。編集チームは、創設時を知る初代会報編集長の武部俊一さんをはじめ2人の元会報編集長や元塾生の新規会員、JAST賞の受賞者、Webメディアに通じたジャーナリストら多様なバックグラウンドの幅広い年代層で構成され（※）、会員の自主的な活動の場である「検証プロジェクト」の一環として進めていくことになった。

●デジタル化ですっかり変わった仕事の仕方

30年間の歩みを振り返るに当たって、メンバーから気になる問題や関心のあるテーマ、知りたい視点などを自由にあげてもらった。新規会員はJASTJそのものを知るうえで沿革に関心がある。また、この30年間にものごとを伝える仕事の仕方そのものが、インターネットやデジタル化によって大きく変貌したと痛感しているメンバーも多い。

新聞・雑誌などの文字編集の仕事では、原稿用紙の枠目に書き込み、送稿（鉄道便、オートバイ便、電話での読み上げ、ファックス送信など）する方法からインターネットなどによる通信に変わった。写真の撮影や送信も同様。Web情報に頼る取材の仕方、個人での発信など、身近な仕事が大きく変わった点が共通した認識であった。

SNSの発展で真偽が定かでない情報の拡散をはじめ、功罪ともにどのような影響が生じているか。AIの活用で、私たちの仕事はどう変わるのか。こうした問いは共通の関心事だけに、編集メンバーだけでなく、JASTJ会員にも実例や見解を聞くことにした。

●30年の変化で気になるテーマ

振り返りのなかで知りたい、調べたいこととして、メンバーが上げたのは以下の通りである。どのテーマも関心のある会員は多いだろう。

- ・戦争体験した世代記者の核兵器開発、原子力平

和利用への受け止め

- ・天体望遠鏡の発展
- ・気候変動の国際取り組み（COP）の動きと対策
- ・捕鯨問題（食、動物保護）をめぐる対立と方向
- ・放射性廃棄物の処分問題
- ・大地震の発生確率の分かりやすい伝え方
- ・科学ジャーナリズムと科学コミュニケーションの変遷
- ・iPS細胞と先端医療（再生医療、生殖細胞など）の発展
- ・脱炭素と電動化・自動化など自動車世界の変遷



JASTJの歴史を知るため、編集メンバーが参照している年表や会報、10周年記念出版本。

●未来志向、明日に何が起きるか

歴史を知って未来を見つめる。過去だけでなく、「これから人類史、生命史を変える事件、出来事が起きたらどうするかを考えておくことも大事だ」との意見も出された。

知的生命が見つかったときや小惑星の衝突が予測されたときにどう報道するか。数学上の難問解決と残された問いに何があるのか。AIとどうつき合っていくか。量子コンピューターの発展は何をもたらすか。この30年でも思いがけないことが起きただけに、先の30年は何が起きるかを展望しておきたい。記念誌の最終章には、30年後の予測とその時代への向き合い方の提言を会員から寄せていただきたいと願っている。

（※） 記念誌編集チームのメンバーは8月末現在、井内、井上、亀松、佐藤（年）、高木、武部、都丸、中川、中野（直）、西野、藤田（貢）、宮野である。

（理事 佐藤年緒）

活動の源流と人 — 例会、見学会、シンポジウム

● 例会は人脈の宝庫

ジャーナリストにとって人脈は大切な宝ものである。JASTJが主要な行事として開催を続けてきた例会は、その宝庫と言えよう。あらためて数え上げてみると、この30年間に200回を優に超える例会が積み重ねられていた。お招きした200人余の講師たちは、研究者、技術者、行政官、ジャーナリストなど多彩。折に触れてシンポジウムや見学会も催してきた。



第1回例会での講師米沢富美子さん
(1994.10.13、武部俊一撮影)

私たちの知的好奇心を満たし、科学・技術と社会・経済を考える視野を広げていただいたことに感謝を込めて、30年間の例会の一覧表を編集中の30周年記念誌に掲載する予定だ。

例会講師のうち、米沢富美子さん、近藤陽次さん、森茂さん、田中豊一さん、益川敏英さん、高城重厚さん、磯部琇三さん、宅間正夫さん、戸塚洋二さん、海部宣男さん、宇井純さん、有馬朗人さん、北澤宏一さん、遠藤章さん、藤田恒夫さん、倉本昌昭さんの16人（例会登場順）が鬼籍に入られた。あらためてご冥福をお祈りする。振り返れば、多種多様な方々に花を添えていただいた30年だった。

米沢富美子さんはJASTJ設立後の最初の例会の講師として「複雑液体の研究」を講演、のちにJASTJ賞の選考委員として尽力くださった。酸化物質超電導物質の研究で活躍された北澤宏一さんもJST理事長時代にJASTJ賞の選考委員として応援くださった。科学技術庁出身の倉本昌昭さんは科学技術広報財団理事長の時代に、虎ノ門の同財団内にJASTJ最初の事務所機能を提供くださり、のちにJASTJ監事を務めるなど終始サポートしてくださいました。

● 研究者の期待を受けて

設立当初から研究者や行政、民間の関係者の応援をいただいた。創刊当時の会報の巻頭言には、外部識者がJASTJの果たす役割に期待する論考を寄せている。江沢洋氏の「科学の総合誌を待望」（第2号）、村上陽一郎氏の「専門家と非専門家をつなぐ役目」（第3号）、松本三和夫氏の「科学技術社会学の視点」（第4号）、廣井脩氏の「あいまい地震情報をどう伝えるか」（第5号）など、その論点はいまでも私たちが耳を傾けるべき点を突いている。

研究者や外部団体の協力を得ながら、シンポジウムを開催した。当初はJASTJの総会に合わせて年1回のペース。「大震災報道『阪神』から学ぶ教訓」（1995.4）、「原子力と報道 もんじゅ事故をどうみるか」（1996.4）「医療と報道 エイズから臓器移植まで」（1997.4）「科学教育はジャーナリズムに何を望むか」（1998.1）、「環境と報道 地球環境問題をめぐって」（1998.4）など、外部団体との共催も含めてこれまでに12回を数える。最近ではオンライントークとして「科学と科学コミュニケーションの未来を語る」をテーマに、日本サイエンスコミュニケーション協会、日本科学振興協会との3者連携でオンライン開催（2022.10.11）するなど形式も大きく変化している。

● 人気の見学会

当初から会員に人気のある活動は「見学会」である。これまでに42回実施した。第1回の「サッポロビール（恵比寿）VRで100年前の工場見学」（1994.10）に始まり、「理化学研究所（和光市）有馬理事長と懇談」（1995.6）、「トヨタ自動車・東富士研究所衝突デモ実験」（1995.10）などと、民間も含め研究所や工場見学など、現場を知る機会になってきた。京都、大阪、名古屋、長野、福井など地方都市でのシンポジウムや見学会も行い、さらにすばる天文台（ハワイ、1999.6と2013.5）、ALMA天文台（チリ）とアルゼンチン皆既日食（2010.7）といった海外の天文観測施設見学などの視察も行われた。見学会は、賛助会員の企業や研究所を知る機会にもなってきた。（顧問 武部俊一/ 理事 佐藤年緒）